



孩
風
記
自
一
三
五

甲
功
五
族
号
共
六
八
共
十
三

ル 4
375
10



門 凡呂4
號 275
卷 10

筑前國續風土記卷之二十二

東之海

築前

古城 古戰場 目錄

夜須郡

山隈山古城

栗林城址

阿弥陀峯古城

小鷹山古城

弥長古城

鼓ヶ岳古城

片山古城

千手村古城

杵ヶ本古城

古所山古城

上座郡

左右良古城

前隈山古城

志波古城

原鶴古戰場

三日月古城

長尾古城

鶴木山古城

米山古城

鳥岳古城

高鼻古城

村上古城

松尾古城

埴山古城

針目古城

真竹山古城

八尋寺古戰場
藏書

下座郡

三城渡古戦 休森古城 岩切山古城 茶臼山古城
小田村古城

嘉摩郡

益富城址 平山王古城 山野村古城 筒見城岸殿城
馬見古城 片邊古城

穂波郡

鬼杵城 懸尾城 米山古戦 小佐古城址
内野邑 扇山古城 茶臼山古城 城山古城
高山古城 木実山古城 笠木山古城 葛山古城
宮山古城

筑前國續風土記卷二十二

古城古戦場

夜須郡

山隈山古城

四三崎村の東南に山隈山をいふ山城址を是れ山早川
津系築まきと云ふ丸の址を山早川と云ふと云ふ
あり山と筑前筑後とをさくし毛布丸の址を筑後と
属せり筑後とて八山の名と云ふと云ふ二丸三丸
ありと筑前と属して四三崎の内之山の東南に二里に
方北平系あり是と山隈系といふは筑後の方度
く筑前の方地あり太刀洗川といふ河をいふ所古戦
場ありといふといふ名ありとや延文四年七月南朝の所

方肥後の菊地元隆と増進して 後醍醐帝が六乃
皇子征西將軍宮と大將として右軍府とあること
は是れ太宰少貳元隆と相尚子息新少貳忠資甥の太
宰元隆と相恭元隆の相信外孫といふ馬日下部
牛養松浦の重子重高木服部重木高田三系村月
淡谷中田松田河尻滝摩麻子木おとお借主勢と
人杜の後りと前と尚て味坂の店と陣とある菊地方は
征西將軍宮洞院大納言竹井院三位中將春日中納言
山院四位少將土御門少將坊城三位重光と土御門
十二人新田の一族といふ岩相相換と世良田太保右
正大弼桃井左系元江田丹波と山名因幡と堀江十部

里見十部侍大將といふ菊地元隆と武光子息元隆次武
政甥元隆次武信同孫元隆武明赤星掃部助武貴
城敵前名和伯耆と長村守教宮形部重光形部
外孫といふ津田丹波と牛養松浦と河津次郎相佐治
淡谷三河守崎津上総四郎といふ氏部伊东掃部
波多江三郎是れ元隆の兵として都合八の余人元隆
元高良山柳坂水繩山といふ陣と七月十九日菊地
元隆河津と元隆と少貳と陣と切つた京田秋月三系
松浦の兵といふ少貳と先陣といふ一ツ七村といふ
先よと併入といふ少貳といふ山名といふ山名といふ
とといふ山名といふ山名といふ山名といふ山名といふ
とといふ山名といふ山名といふ山名といふ山名といふ

あつしと海き沿きて細く二筋をたると小武方より三ヶ
所迄切て小橋と後一筋をまじり人馬おきてはつぎ
やうもせく西陣僅り一所せりなほして旗の紋あやま
るゆゑ程ふれハ菊地を重振して日月おくる旗の隙に
一紙の記徳文と押つきてまじりて移す人其の去年太
宰少武内系部古浦より知りて一色討まんとせりと菊
地武光後攻して小武と助りしに恨く入す今より
子孫世代まで菊地の人と向てちと川先と移事と
へしはと慈野牛より妻と血成をけりて書りし記
徳又ひれいひたもあつてり移りしをまじりて天
と祈り日と人を知りしんてあつたり八月十日乃取

菊地武光とあまじり兵を白人とすくつて山の根より搦
まへ移りて進めし七の名人とてわらひて押寄る進め人ハ
近付んとす可搦まれば兵教とて殺してしうへわきよりか
内彦のりあつて小武の二百余人の勢格の子とあつたり移し陣全
と並へ集りて居りしに岡の勢とあつて歌と又あつたり事と
そく呼喚してつぎをとして三百餘人死にたり歌陣さつと
立てたててしと明々色ハ菊地原之高民明城越前も件の記
徳文の徳と進めてつぎを人少武と陣と近入新少武と戦ひ
つらつ父と記徳やあつてつらつ新少武終つて討まらる
是をえて新井但馬前後新左衛門肥前刑部を捕度徳也と
おし付敵つて川根と移遷して死にたり菊地方も菊地武

明日敵前より尾兵部痛守都宮刑部重國が治部以下宗
後の兵八十人討ちつゝ二萬の蘭地紀前守武信赤星掃
部成茂共々大軍入りて進み小武方より太宰府後守頼春同
出雲守二万多人とてお城を破りて殺ひたり小武方より後守
頼春と掃部蘭地方より赤星成茂討ちつゝけし宮方
と法城石馬次が判官徳谷豊後守三原左衛門守合田
茂後守松田丹後守以下の兵三百餘人殺死し將軍方より倉
坊右衛門亮人山井守相馬少将本務た進部監西川兵衛
右衛門守以下七百餘人討ちつゝ二萬の宮の御勢
田の一族蘭地紀後守一萬餘人と二萬餘人歎の申へおひして
近入られ小武松浦口より山崎崎津濃谷の兵二万あり

た者へもして殺つゝ討ちつゝ日野左衛門坊城三位洞
院大納言尾山院四位少将山崎三位おね小南原中納言春
日守門守守家守つゝ九人の御宮とあり一萬七千
餘とつゝ討ちつゝおはせとて新田の一族せら田岩松
田中樞井口堀口三千餘人歎の中へ言釋をそく近入
殺ひたりと歎破り難くして強りぬ討ちつゝ蘭地
父おち宮沖よと自をまよのころは月御雲宮新
田の一族殺しとて討ちつゝ何のころおししと
命をわき老女と叫びつゝおはせと近入る歎左将とん知
らるるハ様と扱へり討ちつゝも様とらるるハ裏から馬
を射つゝして傷もつゝも平あつゝ人の威もあつゝハ

てと近入く十七夜きて近入るる武光甲と打ちあはせ
小警二を刀切しきふる尚敵の中へ破て入り卯刻を
酉にりりきて息もつる戦少く敵の方より新山武と
始りて一族高徒四百余人軍勢二万六千これより負
一万の余人を山武とけりりして大軍行へ川返さる室
満の岳の麓より右城へ川を渡りたる菊地も軍より傷
ましても討死の者とおもはる八百人ありたれは流て敵
もあつと得た誓く手負と助をてみよと合戦とせり
とて北後由へ川返す九列してかく人れ多く城へ事代
末守り事代（此時の戦い本年記三十三巻）及九列記あり洋多
保く三山隈山より西二里とる別を本年記に記せる系と
記せる石川流河も此時を流流しり（此の系とる）

栗林城址

栗田村より杜月氏の家臣治印治老と云ふ右城也
川中居谷田越つる湯の居より一宅の址あり

阿弥陀峯古城

久光村より杜月氏の瑞珠の（一）と云ふ居板並た道
守りしと云傳あり

小倉城址

河長村より昔樫系河希と云ふ村と云ふけ城と築て
在城より一後杜月種實の出城と成る信内田昔は傷
城と云ふは後ちり末樫系形部備と云ふは杜月の
幕下より一河長郡ふ備の城と傳あり其より兵の庫と

秀吉公九列征伐の時秋月氏を討て殺せり

赤長古城

け村に古城の跡あり治江泊るるに跡あり

鼓ヶ岳古城

と淵村あり大友氏の旗もれ城ありしといふ

け山古城

お丸村あり是れ秋月氏の跡城にして其家老福武氏
濃入る居候しといふ

お子村古城

村のお丸尾山あり其言堂ありてお子村といふ村に
古城も秋月の跡城に福武氏居候しといふ

おの本古城

上秋月邑あり是れ秋月種實の邑城ありといふ

古所山古城

秋月氏の城址を後現の村より西の方二町斗ありあり
古所山より西麓あり九町あり上あり城の南に大門の
址あり城より石垣のあり残しあり此城もよりお丸尾
ありしといふ和元年に崩れありといふ

上座郡

左右良古城

麻呂良の神社のあり別にお丸にけ城は秋月種實の築

しありて長津川國境同く主水と云い古城と云い居たり
小早川隆景の主たりし時仁保石原を更隆康といふ
者と並ぶ隆景の弟より秀村の向といふ伊豆野樂助といふ
城ありしなり 黒田長政公入國の後家臣梨山傳後利安と
一万の石の米地と給りし程國此事と司りしは城と
道と元和元年 台命の後國の瑞穂と崩れしは時
け城とこけたり城の替りし梨山傳後と居りし定地と
其かこけりし楠本も里人れ曰は樹の根を立んとす向を
必枯る又他の人れ根を立んと別常の強ありし事は
といふ

前隈山古城

麻氏良山のりある小山に古城のありしなり是麻氏
良の瑞穂なり

志波古城

志波村の境田と鳥山のふち中と城ありし平家の
古城といふ傳へり又志波山といふ古城ありし月氏の瑞
穂ありしといふ

赤霧古戰場

天正九年

久長宮村と赤霧といふ所ありし是月氏と大友氏合戦
をいふ也戰場を今も畠といふなり程細といふ所も是
軍勢の程と著るなりといふは赤霧の合戦は天正九
年秋路のりし月氏と大友氏の軍勢同様に治部少輔

重と案内者として薩後國生於那の働く口由長岩
の城と四座刑部が捕焼系所坊と云信指勢して大友
方とするとも中く秋月大勢と防と返す事能らん
飛押と以て豊後と急と告く是に依て大友より生葉
と軍勢と向ふに兼てより田球珠と那那急のこち
をいふころ朽網宗唐と大將として三人余日田より
直に薩後を生葉と攻め押出十月四日宗唐大勢との
城と取け同信宗法部が捕焼系森捕三与之方秋月
推実
の家と攻め秋月種実是と守るをその後詰ると是
り方向してと叶すとして田田普三信長谷山氏部が捕と
先陣と定め押出するを二の進軍一旗下此勢と集り

八ヶ崎人として島山と陣とより大友方にも宗唐大勢
寺の城と攻め秋月定之に後詰ると一と同心して事
あるは二万の余り人豊後と立て是より生葉と押出
朽網と一より攻め大勢と攻め城と巻き薩後川也流と
おぼり計目の城と陣とより秋月是と立てる宗唐と
陣と後て信宗を合戦に秋月の兼て共前のも橋
元種も出勢あるは一と元種和と口と進て十月七
日の萩高部池田と云下と急伏し角と進て退きの合
戦始ると信宗より共後勢是と告ぐも知れ信宗の
八ヶ崎人の勢宗唐と攻めつと大軍と始り入勢と
攻戦おぼり宗唐の勢は内より勢と上野入る

思ひしと異なることしるる彼兵起りてはありて澄きて
山王森長津とて崩れしむる秋月言橋ある所の勝
勝と宗岡と化して逃ぐるをこれ敵と追まこむる満
死する者幾程といふ事と云す秋月方と討むる首
七白と十白と云ふことけし御冥と概のひたむきの城と
川のわたりを後勝ハと交の戦と能士多く討死しこれハ
能後五陣も成りてく日田球珠等て川をぐる豊後
の士大將数人と交能後と出出れハ大野と云と攻めす
上野をこの敵と追りしはういふは一洲もへるといふと
かく敵軍して川入るるを無念なり

二日月古城

池田村あり城の形二日月と似るは名づくは林
月将と取之し城あり城あり中頼とた近将監と
云々と云ふ里を豊のありあり

長尾古城

林田村ありは城も秋月の瑞珠として小村甲斐と
原左衛門と云々と入るるといふ小村甲斐の妻ハ勝
る勇女成るとも或時大友宗麟と五百余人の兵
とをりては長尾の城と攻む時甲斐ハ瑞珠の礼
として秋月と云ふ妻甲斐と帯し白綾の袴を
長刀横し入て原裏と廻り旗指物と云ふと大友
とかくし士率と下知し事勇将のとし城守の兵と

ハ一程遠くありて女房いりて歌と遊む河方の色
と直ぐに再度け城とゆふくはく馬川をせよ
長刀とひらめく大子の門外まで下知をくハ城中の
人殺すく出て戦ひのちありてけく責戦ひはれハ
城中の兵多く討ちとれ女房はとててまハ川へま
まうと下知一城ありていりしと也

鴉木山古城

林田村とあり是ハ長尾の城なり山城ありといふ

赤山古城

国見城も云

白木村とあり國見の城も云白木玄蕃元といふもの
左城あり後ハ秋月氏ハ瑞穂とありて赤山松島流後

といふ古城ありといふ

鳥岳古城

宝珠山村とあり森とありて古城と存といふ
後ハ郡士宝珠山をいふ位す是秋月氏の一族なり

高鼻古城

高鼻山のうへへ古城あり高鼻と云ふといふ
河を流人の墓ありといふ

村上古城

黒川村黒松といふ河とあり城主知といふ

松尾古城

小石系村とありいりて宝珠山山城と云ふといふ

なりと云 長政公入国の後家臣中同前帝在府とい城
と置きし一太坂陣の後元和七年 公命に依り破崩
す

樹山古墳

佐田村より上座郡中といふ山之大友宗禰
耶蘇宗より多く神社佛と焼拂ひし所
彦山の彦主と賣し付彦主此山に葬りし所
あり

針目古墳

穂坂邑より穂坂と大山の境の東を巻居り
へり是ハ秋月種三の築し城として初山九を赤大山源九

場といふ者と城代として入るる所なり初山より力
之深彦次郎といふ者なり其宮色高うつくしけれハ
九を赤通しつる九を赤し書けし城守といふをけ
るつ七つ代祝義として与力代士の書とも初山と定し
湯す物より初山と書彦次郎と書し一言の詞もかく刺他
の書しハ定例として書とさしける彦次郎と書しハ書と
抄す無とさるる彦次郎と書ハ九を赤と書通しし
形もつるしと和し思ひあふ家より入りまると書
垂白書より言久保西自と失いし事と憤り流後長
岩の岡住河刑部補統系と和し流多と書し初山
初山と成るる或時大山源九の秋月と和し九を赤し

城を残り之勢を奪と伺ひ敵の兵と門入裏切して初山
夫婦と切教す強う若討死し或は流矢に命を失ひ刑部を捕
まへて流しに大友方へ人殺と指す事せしめ勅命とせしめ
是天正九年の事と物と云ふ事徳川合戦と初月寺傳後
又け城初月方と取らるけ城の爲に名九列軍記と云ふ
甲斐河原左衛門之久保の事と云ふ事河原左衛門の事と
は物も大友無慮死し本邑甲斐と云ふ長尾の城あり
了し中記より又村翁の説より云ふ久保の事と云ふ事
初山九と傳と云ふ事

高井山古城

高井村と云ふ初月の瑞峰として野子溪谷と云ふ者城あり

と云ふと云

下座郡

二本渡 一本城

長田村と云ふけ川元和の初はまてを程久ありしと云
川あせて山川と云ふ建武二年れ長尾のころ菊地揚助女
武俊と少武太郎頼尚と此渡して合戦なり事太平記
十三年と云ふころ河原左衛門水城と云ふ水城と云ふ
河原左衛門や初山名抄といはけ初の内三城の御とあり此
川のまじりありけ

体松古城

体松一説
子所にも云

横系村の上れりあり、永禄十一年八月秋月種高毛利
元就と一味し其勢以強大なりし一之友家と云へられし
先秋月と退治せりんハ忽ち大事出来んとて戸次母後等
體連吉弘左衛門守體理向陣中も體速此三將二弟
余の軍兵と川率して八月十号秋月と發向一甘水長
谷のりして押浩の種實の勢松の在の校邑より出でて
一日七夜の陰人あり戸次母後等ハ十時安東由布
孫費とたてりて自方を刀折する百箇より軍兵
西よりやん交戦りしは種高松の在れ校城と川拂の
軍勢と率して古河岳の城と川のける戸次母後等と

後備してあそ所の陣ととも向陣越中もる親善岳と
陣ととも喜松左衛門の場山麓後路と中へ狭しと
古河岳と陣と成り古河岳を攻めしは種高の古河山に
嶮難あり高山に中へ狭し種高よりいそぎをぬる
あそ城と見よるりありて利にまよなき又城中の
者もも唯嶮此と種高の勢ありよきぬと等して款と
退る候とせし高橋體操秋月種高の支人より藤羽
へ使とをり加勢と乞元就許容して中國勢と通さ
りしすへられハ永禄最後の國士中へ元就と與力し大
友と背く者數多出來て申込勢乃あそより各城との
てハ種高よりいそぎて進み川拂の己進むをわしとゆりたり

かゝるまれば逆攻めを國士冷人も名を所へぬるがごと
毛利勝後海軍の事なるとすへまれば枯月への身は先
能後必なる山へ川より防戦の用意とすへと大友の
も知せしむるに依りて川をせんせし九月三日の戦枯月
勢四千人出陣越中吉弘に迫るまゝ両陣へ戦
討とつけて寒くして大軍兼て川をせんせし不
たれ戦軍もなるとも八冬後勢以外の外大崩れして故田
ふも川の中あり甘原長あつと申ぬりなると系徳に
と返くもあり枯月勝後がとて追うけて敵と申す事
夥し茄子所の陣も川返きなる勢と追ふかたてとよ
むかるる戦軍の事とてとるへ八戸次丹後とよの

者も崩れしむる味方と敵とに増して追ふかつて口士
おとするやとて是は味方を白根吉弘の者何れ
誰とて呼び呼へも大勝勝とすむるおとする
多ゆとて八冬後勢切外はとるなりなると於て白根吉
弘ももて名と得し者も多くと口士討つて追はる艦連
是ととていふと戦軍なれとて敵味方と知れぬ事や
あるといふて自身艦あつとて追はる敵と知らうけく
実傷するからとて八冬後軍勢と戦ひける艦連と
恥しむるも口士おとやめて枯月勝と戦うる者と
あつとて追はる八冬後軍勢も白根吉弘の勢も
級中して能後とて川よりなり枯月軍勢も甘原

高橋の甲て進討し正らねりて豊後國の住人利光兵庫
舟橋中言著先七討もよなり艦連くもも大次中務艦
方曰治部痛親宗曰刑部痛親宗曰兵部艦賢討死す
是等六皆大友親族之家来りて十時左近を交陣せり
由由布五重を束安右馬允堀新屋門と始りて勇士
五十八人折さるなり永禄十年九月二日休松將軍是
之奈本村の内務大さこいふ交りて討死せし人の首
と堀や一隊あり名と首塚と云進討この首塚と安さ
しそるじこ高きありありとて村人驚き事疎くあり

岩切山古城

之奈本村ありいささか大居りし城も詳をいひ山

の前之人埋塚とていひ城址とていひ清見とて福壽

茶臼山古城

河原村とあり是又城と詳をいひ岩切山とい城と
取合をいひと云又此村の中は村月氏の家長之奈本は平次
の宅の址とて竹林の中とていひ梅庵

小田村古城

小田村の枝邑小田屋といふは村月の居城として
野中彦を清と云古城代といふ

秋月
方の
勝利
と云

赤平郡

益富城址

此城あり下申益村より大隈所へ近き所世人は大隈の城
より城の廣く南に四千里横九千里高四千里是れ秋
月種吉の父宗全源長城ありしと天正十九年秀吉は九
州征伐の時四月朔日丹波少将秀勝と大將として蒲生氏
郷前田利長と副将として少将益の勢と以て此城の
三里東より西に岩名の城と攻めせしむるこの内より
益城より其勢の急を以て城より去る者大忽城と出で
是れ秋月の在城古河より門退り其地より秀吉は沖
陣と移りて此城より退るあり八所城と城

へて秋月と城より長政公入國の後此城と改築せ
る此城後及又と湯と通る又と湯丞電の後を利徳と
通る一々元和元年 台命に依て此城崩る

たる王の古城

上山田村とあり筑前中納言秀秋の討築て此城日野
船右衛門と入道あり

山野村古城

山野村の境内に伊勢言形と云は俗の言おらせり言
ありし言へは亦ち宇佐の神社ありしと村中に古城あり
是と氏後宮成氏おは氏の古城と云は亦氏を今も
宇佐の大宮司といふ家より當りて是よりありし

尚見城 岸原城

廿二城の証下山田村あり城之知事は

馬見古城

馬見村の上古城のありありの城と云永祿のころ
大友宗麟能前以内証と入並たりけ馬見城
と毛利吉弘播磨守の証け並たり物より天正七年秋
月より彼と以て徳兵衛と告げけ方と一味一人質と出され
る人と申すは徳兵衛の証けけ口とせはとて今も今も
うと云まは龍造与澄信方へ口と今も一行をてしと云
と背く大友の禍出たてし先質と出し一旦偽の和帳
とあり時の証と出るは後ら又謀と以て質と云ははし

と云いひのり成きて史と述し十二歳とあり女といは
と云ふと云ふは汝知ありしは徳兵衛け枯月程と云ふ
人質と出す一人の証あり今彼と云ふは背くは城と
攻めたり高村の辨と方ととせし動して人殺められと
け城と説くことと云ふ証と出するは一族
の証といひは事と教と云ふは只今質と出するは城と
説く一証と云ふは事と云ふは事と云ふは事と云ふは
汝と質と云ふはこれより大友屋形と逆心して枯月
と一証あり事といひは物と云ふは汝説のと云ふは教と云
事と云ふは事と云ふは事と云ふは事と云ふは事と云
と云ふは小証と云ふは事と云ふは事と云ふは事と云

亦為且父の忠義の爲とていつに母も涙と押へて言
きも穢しきも子と誅とていつ者ハせられも今父の室お如
くゆり命と誓ても扇形極の沖波をいあましなさい
命と押と誅を人と成ても父の冥加つさおさしあハ
ゆり身もやう安撫なりき唯いへく君と命としよう
父の名とちとていひまふ天の恵とあて命も助う
父徳を全き事とていつと誅めくも女泪のりう沖心
安く思ふは我命と父と兼せりハ城を能く守りて
扇形極への忠義ハ沖奉るぬ久我命とていつと忠義の
事ゆりあましにいつやうの事ゆりいつてり我扇形
極の沖とて又父ハ沖とていつぬりあまんやとていつ

更と泪とこぼさすうき泣きあすてぬ初めとていつ
志と感入るるをいつ彼者と割て柱目へとていつ
ねほて後結ぶるか人沖波洗立命とていつ女忠義の
真高人とていつ魚の腹と結ぶる女と入彼女の信る馬
をいつ月も七の束縛ゆり忍ひ入りすみおひしと約し
て其部とていつ誰なく盗出さる沖波洗り馬
足つかりす其後ハ日思へのけお後ハ城本十命と
あつれお舞沖波洗り切と感せしきとていつ

片邊 古城

推本村とていつ城主を毛利徳実とていつ族毛利初由と
ていつとや山とていつ東光とていつ禪寺とていつ

墓あり其位牌に天正四年と書り

穂波郡

鬼杖城

内住村の内古野山と云ふ

社印宮内にはと云ふ所の山の中より

古野といふけ古野の山と云ふ古城を鬼杖の城と云ふ何處の村といふ人も居たりしやと云ふ

掛尾城

内住村の内懸尾の城といふあり是又城の名を道に

八木山古城

八木山村と云ふ上下の邑と云ふあり古くより多かりて人寰に

と云ふ上村と城と尾と云ふ山あり南の山龍王岳といふ

多かりて山あり村民の之を天正の頃や云ふは戸次

氏の兵といはれしに云ふと秋月氏の軍勢あり其

藩府勢も助合を攻めり其時多かり人殺討死せり

と云ふと埋りしに城と尾と云ふ人城と云ふは

天正九年十月の月を後に古家の軍勢能く

生算動しお出りし秋月様と上座部と出立して對

陣よりし風吹きありて云ふは戸次も古

の古橋紹運古家の兵あり余人は行軍して秋月勢と

度りもせん為秋月内へ働き飯隊行崎の邊まで
高く放火すとも山合敵をなす六月三日に門を
とす秋月方より程三上産郡山陣の爲にわれは及雪組
運と平場とその合戦成りかへし只敵の川より山崎
乃狭き交宿のまゝめ切ふと討つと兼て白井原山
系鷹山より野山馬見するの城代も中と詮義一垂り
事なれば四女入部して戸次高橋両家の勢門拂ひゆく
跡と追てをかつとらる及雪組運はとらて少くも敵と
捕ふく足輕をと後陣と之を矢の敵の付来を防ぎ
て静く門退く秋月勢はとらて急を付て競ひかた
道雪組運の本山の東石坂にて久陣後陣一夜と居て

戦あつたなり

返り突く秋月勢及旗本共志ありて支て戦ひ
終つて入す門退くと追討せしむ極波部土師と云
あすして三里の男一を也し合を以て及雪組運の
両首殺す百二十は是とて用ひてはす交と秋月
爲る居の家老もけしと守付上野原坂田市と並
并中央前城井長登上京勢上野原陣とに僅只と秋月
と追討つとと門率してあふ余人四井坂と打ちし居山
系より横合とつとらる是とらて筑前退散せし秋
月勢力と得一度と成合て惣勢八女八百人急と追け
つりさ雪組運良將つととてはと和らるの合戦り
人馬たつ方とつと秋月方荒ふとてあも大勢あり

近し合せて幾んやうと云くお丹と云くは門近く秋月
勢ハ揚々宗川取れらる敵と云く追まて三百余人討ち行
り上野坂田を控えて追ひく多年軍切も古在られハ
款の也すへき彦と云くを先と云く抗と云くけ静と云
の也精と云く切取と云くハ岡と云くけ追つめ討ちくこ
の良将一夜も終く死さん去るも流石の良将ありとハ秘金
形まで難なく討ちくもさるるつと云くれハ秋月勢もと云
是と云くこくハ本と云くハ追討と云く首首百餘級
石坂殿と云く切けく秋月と云くるるを云へし云く云
城之尾のふ人塚と云くもい時塚と云く塚と云く

小佐古城址

小石野村の内なる野色の境山と云く城址ニありあり
城と云く是と云く

内野村古城

村のようとも石の城址あり城と云く知と云く所と云くまの
西山と云くも城址あり素の石れ城と云く云と云く城と
不詳

扇山古城

河島村とあり秋月の瑞城ニ村氏ハ修理殿城と云
云と云くれとも云く性不詳

茶臼山古城

河島村とあり秋月の瑞城ニあり

城山古蹟

久保白村あり柿月の瑞城也

高の山古蹟

高田村あり柿月ハ瑞城なり

木更山古蹟

河袋村あり路月乃瑞城なり

笠本山古蹟

高司村あり在丸二丸三丸の瑞城なりあり空壇あり西の基に大賀細の内を有るけし山をさすなり能えゆ始らふ像の瑞城にして丘に戦常なる要を城なり其後柿月氏の城なり其子石見柏井なるあり

高利山雲け三人城代きりりりりり

葛山古蹟

高司村あり瑞城の出城なり

宮山古蹟

は京村の高山の上より少き城址なり高濱の城主高橋氏乃家臣高山高天守り高者高き住りりり

筑前國續風土記卷二十四

古城古戰場目錄

鞍子郡

勝野古戰場

劍岳古城

檜現山古城

鷹取山古城

鷹取山古城

重生村古城

宇場古城

慈峯古城

篠城

黒丸村古城

宮永村古城

小金丸古城

祇園岳古城

龍岳古城

福付古城

山崎村古城

遠賀郡

園城址

龍王山古城

雨乞古城

猫城

浅川邑古城

本城邑古城

古里村古城

畑古城

升尾古城

一瀬古城

大野村古城

陣原

黒崎古城

帆柱山古城

花尾古城

濱田古城

藤谷古城

山麻村古城

内藤陣山

花房古城

宗像郡

片根城

吉田村古城

許斐山古城

飯森古城

白山古城

神湊古城

宗像山城址

手光村古城

宮地岳古城

勝浦岳古城

高宮岳古城

本本邑古城

舍利倉村古城

太礼村古城

徳末村古城

石丸村古城

平等寺古城

筑前國續風土記卷之二十四

古城古戰場

鞍手郡

勝野古戰場

此而龍徳村龍岳の城を松氏と河徳村権現山の
城とて夜に戦ひて松氏每交けあつて亦傷れり
跡と名付たり村中麻生屋塚とてあり是権現山乃
城とありし人又馬塚とてあり是も昔古戦あり特
馬と埋りしことや村昔も野原とて民家少く近
代村屋とあり又新山崎村も是長五年とてありて
之れ村あり

古城古戰場
鞍手郡
勝野古戰場

剣岳古城

此城を龍岳の瑞珠として誦於女座云々云々瑞珠高き
ありと云ふ中山邑とあり

檀取山古城

此野村あり高山の上と云ふ天正の頃毛利を討ち捕虜
實を城より是を友氏に幕下し 長政公入用の後い
城とありと云ふ築き家臣毛利但ると入るる是を長十
年而平郡大隈の城と云ふりい城といふ手塚水雪と入
るりい山昔の本をりしと水雪を城を討初め程
今も茂山と成る元和元年 台合より依て崩るる

徳川國 芝草取山古城 日十一日

是又此野村とあり 永禄天正の頃麻生澄益と城
ありと云ふ

金生村古城

本村より南二丁計ありいつの町をや入田孫令と云ふ人
を城と云ふと云ふ

湯京村古城

湯京村の本村より南二丁計あり昔々大内家より
尚團と銘する村に家臣松井修程と云ふ者と云ふ城と云ふ
是を郡中の事と銘と云ふと云ふ郡守秀卿お経て
父の職と云ふけ尚郡吉川卿及び高橋部の内と云ふ三百
余丁地と銘すると云ふ方八士三千五人ありて供と云ふ城と

守り物あり大内家滅亡の後秋月将より属し城より
居る備ありて常より住りたり或時後者を教
して其勢なりとて陸と河の富儀勢ありて攻めたり
越中守甚き強く防ぎけりとも多勢と敵りて
終に戦死せりと云々又よりい城廢り越中守を
孫頼高國とあり

徳峯古城

根田村あり在村より一里西と云城主詳ありは徳
城とも云々鳴山の南端山の少と云い云々と云々山
ありて方より徳見ゆ其上平らにして大和の生約
山と云々

紫ノ城

乙野村あり在村より西の方七丁と云城主名詳

馬丸村古城

此城は安永釋名帝と云若居りしと云是を寧少
武の瑞城たりと云

宮永邑古城

在村より西の方八丁と云宗像氏の瑞城にして昔
田舎之物と云古城焉と云

小金原古戰場

小依高野稲光ニヶ村の境に長き京より小金原と云
又云高野少金京と云小村より小依邑に属し古戰場と

之知小依の境内よりけし天正十年十二月十二日之
之縁の有家戰場あり其合戦の始終と尋らば
之縁郡西御の存し川付民部源川修理源料將監
井原左衛門入之難波將監兼京雅樂助川野彈正石
はるゝ云々ありし事一に之を證載彼等と攻陣ん
とせし事も終る池子永禄十年十月之に平宗像
の幕下より氏貞も内へ被ふと幕下しせん事と豫
めれ料を以悦の別源川と致ふして之亦二十一人
は方とつきて之を押への為し之を證あつて是事あり
之を鞆子郡若宮々々在来之縁領ありし事一近
年之是方より开らるぬ物と云去年之是之縁

和勝あり領地の端より方切と定し取後より之邊
よりよりさして婚姻と結ひ氏貞の妹お色姫二十一人
ありしと之を道雪と嫁せしむ糖田として西の地と付
て是事あり終るまはれは之を方よりある事と云之縁
へ是より是よりある事と云之縁は領地とありお色
之縁の領地あり双方はれは之よりありし河付源川
と云めつ士方との金取領地も在雪より山野
十時堀安東内田と云きと結りたる所新給人地
也して是よりより川付源川と云しは思ひなきも懐成
押へしと夜の誓地と氏貞より結りたる事と云井
原の形のとく家代りして後住む事と云氏部

修理下任別一西の宅とありて追立られし事と之念
くさひ何れ事の時よしと立死家人と移遷して死
無靈とありさ雪といふに成報んとあひて何れと
憤りと押へて年月と送りたるを悪くあれは中と
鶴手郡鷹取の城を毛利兵勢備極其と大友の旗
とて此の志とあせりしに村月桂三鷹取と云
んすはしとて鷹取の道雪なりと立死道雪なり
兵糧玉と合方はなりと送りたる是と依てさ雪なり
と糧と成報送りしとせしとて鷹取の城とあり
後日教人の人とも常と悲恨とあり路次の坊
も多しとやと名を雪とせしはた中とありとて

先は者とていつて氏貞と申送りたるは鷹取城へある
と合方はしすし付山越ふ宮の店と姓ありしとあり
人教と申通しとてしすし告しとせしは氏貞の
別名とありし人とも能くしは立死勢を表へて
人教と申す別率忽の働なりしとてしとてしと知
せしとてしと道雪なりし由布五と入る雪前年
多しとありしとて鷹取の城と兵糧とありしと
天正十年十月十日とありしとて鷹取の城と
宮田とありしとて鷹取の城と兵糧とありしと
かくて鷹取の家人若くは居る内とて源川右兵衛
貞國河野伊三郎丹波守とありしとて京九市船川とありしと

古野甚九郎と外波是お加りう部合あす又一味して
トケウハ氏貞よりれ候なりとて立見辨と安徳と母一
らる事の事念さよ我等は代而の住人らる西
口と立見候と付しもてあかしく住みと追まよと立見
憤きらる方なりせめては若者と討ちて数年のま根
と散らんともと上りお人々集りて評議しるハあま
川とせきとあて水と流しと是と流んとすまを
弓矢炮と放ちけれと心と討んハいふともなれ
は依り候なりとて河津候近盛長奉りて井杭
おせ用ととあは十方の午刻立見辨あす取らる
交り松十郎ハ杜月ハ一味あまハ龍徳より人殺と出

して喰とらんとい立見辨忽と攻崩し城らりて
追つめ静ととゆらる友池川とあつて孫と入て氣
宗像辨ととあんと入とつり辨あすめんとすま
河津の善徳の中知すと入てあとの曲若く候と先
軍神とあまことと由布七郎の孫飛りてお傷は是と
入て友池の若き跡と慕つて付なれハ立見辨と人殺
と操せしと車門とつてあつて宗像氏の家人も追付く
幾らる一騎けり近附きまハ門包すまて討ちあま
立見辨金生の前川と流りて高野とさうて川原ら
とあま宮にれ住人あまこせと追付らる或は追拂
ひ或は討ちたり漸とつて福光の陣山とさうあま士

率ととてあて人馬は息と休りたり若宮勢も小伏乃
前まで追けりてあて人馬の息と休りたり物々とい事
岳山へ宿をもちていひ氏貞起つて吉田次郎の身辰
石松加賀も秀兼起つて池田の制せしと命せよ松島に
即人馬とてあて池田のあて吉田の痛く御承石松新
三帝同十帝是とて刀あつたり近きなり吉田飛岸
とつけあつて吉田石松馬とあてゆり知く友池の戦
ひ破れしと秀兼とていひ松川をとりていひかへ
向て軍とていひとていひ系田金とてあていひ色の後と
つり少重起つてあて友池少重丸の人へ小伏の前は登
り池集り人馬と集り軍評後する如く吉田石松池付

諸士に向ひし極は是といふ事とはいひて氏
貞心の外れいひきこしといふ人への何れもあつて川を
せよとのいひ渡りたりとていひとあてとせうたれん
いひきも尸極作をいひていひの極よりあていひ今とあてあ
へき極もいひたりとていひ貞心の幼童とあていひ進もあ
ててあていひとていひ進もいひとていひと退りの命
よていひの危角の少治とあていひと進もいひとあていひ
いとよとあていひとあていひもいひの身辰秀兼力ふ及
ていひの左極の思定とあていひは是飛と編りていひ及
いひとあていひの事の時をいひの事とあていひの
へきやうなりといひていひの事とあていひの事とあ

始々友池令丸長井落其外若くあつてゆる侍雑を
しゆく二三百余人又赤弓より流ぬる軍石松十初と始りて
彼是人殺百餘人殺合よ百人と山伏の前と侍ととと
城山の敵とつらんといひ口もや申し刻ふまは石松より始
けたりと向て山伏の敵とつらん事ハ軍の法と非ハあり
さつて侍とと侍と向つて攻くまとも知すつ知くま
も勝も既し城山の言とよりあつたり友池勝はと
んく敵もやつ侍ととあつたりと押出はとと勝と
百余人とより漲る瀑布のとき機とあつて押
あつたり侍方よりあつる友池勝あつたりとあつたりと
山伏の谷と進あつる物も又谷よりとつと進一切と

夕陽と眼の光り奪もてお方れお命も定くこつ西と
あつたり物も平くとと勝と夕陽と負つてと勝とい
ひまは其陣先と尚とと勝とあつたりと勝とと若
高方と必死と極つる兵とあつたりと勝とと進
と山伏の形と改めとす入乱と勝合戦いづつとと勝
勝ハまつとと勝とと先とつらん如くと吉田た進くと負
つる侍とあつたりと勝ととつとと勝とと進くとと
見てと勝の若とと勝とあつれてとつとと勝と吉田
辰石和秀弟と討とと勝とと勝と勝とつとつとと
へよつたりと勝とと勝の中より田田とと勝とと
振て軍とと勝とと勝とと勝とと勝とと勝とと進つて

標立の道はふる勢崩しとて追討く、又も残下
は河をたぐり吉田を捕りて小休して、また勢と追崩し
縁澤より亦、自辰の馬流の男ありて、自辰討まかせ
やせり、たれハ少捕りて、足とてせし、たの道ぬぬ
ありと馬川に、一箇の敵と討んと、大勢に中し、切りたり
立花の大勢は、没し、中し、只一人、延入し、ハ取包んで
おれぬ、石松、亦も父秀兼、討死とす、是も同じく
延し、合を討死す、又宮の侍、百二十人、死す、は討死し、
立花方も、死者、約三千余人、討死たり、口も、こゝ言
ふ、是ハ立花勢、を、清らり、池上つて、人馬と、休り、兵糧、
は、い、親、言、堂、入て、一、巻、と、ぬ、ハ、討、取、一、首、と、ハ、堂、乃

前、と、並、て、並、たり、ぬ、道、ハ、十、四、百、の、子、た、り、山、部、に、川、名
くら、り、り、も、候、一、と、評、の、き、と、ま、戦、清、深、の、け、地、と
ま、た、り、し、新、勢、と、こ、う、て、ゆ、り、柞、この、山、部、系、合、戦、を
宗、像、家、人、西、つ、り、り、ま、河、内、へ、後、ま、さ、り、三十、余、人、の
者、も、之、後、住、別、一、御、里、と、離、ま、し、と、い、ふ、ま、り、る、所、に
ま、も、宗、像、ま、ま、和、格、し、嫁、姻、と、結、ひ、上、の、礼、儀、を、
地、と、誓、り、り、河、を、こ、君、命、を、ま、た、い、家、身、れ、こ、り、ま、ら
し、い、ま、も、立、花、勢、の、恨、と、た、り、入、ま、り、や、う、也、こ、こ、四、里、と
離、ま、し、る、の、ま、り、て、他、地、に、離、ま、し、と、い、ふ、行、の、恨、じ
へ、き、事、り、ま、ん、日、々、と、い、ふ、家、り、り、兼、て、人、殺、と、あ、り、へ、き
し、り、り、し、こ、氏、貞、能、事、り、立、花、家、の、兵、乃、被、地、に、往、來、の

とていふはくは通す人きくしとていふとていふとていふ
しつ用いす君命と背く事是美大なる飛脚あり
次は主人とていふおのれおと坊事大志とていふ
あき歌味方とていふ教とていふ事石仁の事とていふ
お心とていふ公義と廢すとていふ況軍法武形も
あきみとていふ怒るとていふ卒尔の兵とていふ
まら多勢の歌とていふ少勢とていふ切なりとていふ事
あきいふとていふ終るとていふ味方の勢とていふ
あき事是石義とていふ兵とていふ謀とていふ
破るとていふ愚痴の事とていふ是物とていふ
とていふ

祇園兵古城

本城村より松十高を勝とて右左に城とていふ

龍岳古城

龍徳村より松登江連並り居たりし城之村中
家人の宅地多し連並一なり連凍と書りそ祖松
忠後馬具行国防國大内氏の家後龍岳山と大内氏
乃とていふ下出来しより松氏地とていふ松屋部松屋村の
上より右の城とていふとていふ其子孫浮白忠重忠
も子連並し大内氏とていふして龍徳の龍岳の城とていふ
りていふ丹の城とていふ松おとていふ或時松月よりていふ
居の城とていふ松とていふ連並ハ龍岳の城とていふ大内

氏亡して後徳前より大内氏の旗本其城之家人ホ
大友と降る或は毛利家と属し治はる降る松運並
も秋月と降る

稲付の古城

龍徳村より城主詳なり

山崎村古城

城之井と何系といひ人より云何乃特の人より

遠賀郡

岡城跡 今も徳山古城と云

吉原邑より麻生河内と澄守と居謀る麻生氏代々
馬河の南帆柱山の城よりして其後大内家と治ひ一年を
山口と居一年を在國一浦年と系勅す其子も山口と
住しる澄守も山口と居し其母山麻生希も女より
帆柱山の城と居し麻生六國元と妻の生る子も
も長子と澄守と妻の子をれと二男と父死して後見
才也と居と争ひる帆柱乃麻生山口と出仕せりし
う小見治と澄守と居す一と有るれも家老菜田舟
はる云と妻の居る子と云とて合戦後
と居りも方扱して澄守と居るを望川より為る所
と云ふ則け居れ城と居り大内家と後山帆柱の麻生ハ

大内家より出仕を以て奪つた友と供とを以て大友の
麾下とせしめしむるなりて天文十九年大友宗麟の家臣
瓜生左近将軍貞延とて一國の城と攻めし別帳にの麻
生と稱するなりて九月廿七日城と出
内浦に海難ありて其妻と二人の男子と殺して其身を
自害したる家臣兼田小七とて大内隆幸の父子兼三妻の首を
石と付け海にまつり其身も海に身を投ぐるなり後城に
瓜生貞延居候し其妻と供とを以て

龍王山古城

三吉村より城を詳ししに
雨乞古城

天聖村より城を詳ししに

猫城

上戸井聖村より小山今小山よりハ幡宮より此城
初より麻生より出城しつゝ天文六年のころ吉野川より西
宗像氏のより入りし其家臣吉田備りといふ者と雜兵
百五十余人を以て籠置たる物と天正八年九月上旬鶴
と羽郡市原の城を毛利吉宗備後守立花の戸次を以
て勅しつゝして下鶴より出張し一木尾城より陣とより
けり道雪といふとて之を以て是なるハそ方宗像方
の端城と表するなりとすなりハ氏貞多勢といふて後法
寺より物よりそ方け勢を地りぬりて敵とありてハ鶴

と都へ行くことあり敷と送りしに、さうさ竹方の所は
あつくり橋えと申す、若くは押寄、宗重へしと云はれ
結實子細なく、交合して先もあられなく、松嶽と云ふ
多う、城中の兵も、表口へ、入合て命とおし、防ぎ、戦ふ
結實、城中小勢ありと、又悔り、道雪におまけり、限も
と、是とあつと等しく、息も、残らず、攻めり、城守、藤
乃事、あつ、ハ、防、ひ、て、更、へ、り、り、物、も、氏、貞、兼、て、の、お、ま、い
ハ、籠、り、れ、城、ま、ハ、籠、り、と、不、意、に、事、あ、つ、ハ、狼、烟、と、あ、け、し
若くは、岳と、告、ふ、の、事、を、ま、ハ、偏、り、お、ま、い、狼、烟、と
と、つ、り、り、若くは、岳、つ、り、は、と、ん、て、猫、城、の、事、を、あ、つ、り
近付し、て、吉、高、痛、立、命、貞、永、占、初、上、総、貞、辰、石、松、源、宗

貞次、小、堀、對、馬、と、先、と、して、葛、ヶ、岳、と、申、出、一、騎、進、ま、
地、を、つ、け、り、物、本、堀、ま、と、名、一、ハ、城、中、の、力、と、何、ん、と、り、鯨
波、と、も、あ、け、た、る、結、實、を、と、ん、て、若くは、岳、の、大、勢、後、法
す、り、を、い、方、ち、小、勢、を、れ、ハ、取、籠、り、ま、し、こ、つ、つ、ま、一、本
尾、津、内、の、門、ま、し、こ、つ、て、結、實、自、身、殿、して、門、退、く、吉、田
占、初、小、堀、石、松、城、中、の、勢、と、い、つ、り、あ、つ、て、一、子、余、人、と、
進、籠、り、り、結、實、と、許、斐、の、川、邊、で、一、取、て、也、一、大、出
る、程、と、戦、ひ、を、こ、こ、ま、し、こ、も、毛、利、方、ち、小、勢、と、云、ひ
海、へ、つ、り、い、さ、こ、ま、し、こ、事、を、れ、ハ、一、石、力、あ、つ、ハ、門、退、き、一、槍
突、て、ち、り、ま、し、こ、宗、像、勢、ハ、籠、り、宗、川、中、へ、進、り、て、二
百、中、を、あ、つ、た、り、け、川、ま、し、こ、と、も、大、河、と、あ、つ、た、れ、り、

あり多し其増り胸板のさくら許しをあらざる毛利徳
實の勝ちしは負しも助も守りしと敏て徳軍は宗像勢
決して川と後り進みけしは徳軍も先くつるをと義成
ちり士も徳軍と押通て七八人討死したるを席口
との進て水濁ると川をぐる宗像士を捕軍して
さや考る岳へ川とと徳軍のお家遠てたり一町とぬ水
してくれは戸次さきもあらざるを急へ川返りせしなり

浅川邑古城

麻生氏の瑞珠ありしとより浅川村を少後の西回海乃
南谷の角とありし少後の浅川馬邑は河海の南とより海
に近し

中城村古城

け海と河の海に南山谷の中より浅川村の上流に壽永
二年平家の一族安徳天皇と供奉して九列とありし
よりと徳方高惟義と進みしは後醍醐山麻の城を
兵衛次重吉とよのと哲く居ありしを聖徳寺月
畑の城主香月庄司秀別は山麻重吉を叙父ありし
けしと昔て徳方と系し進しと系すし是より依て香
月一家とありてあるが戸兵衛尉も香月と一族ありし
る同く山麻とありたるをくも歌ありしとすへしと
平家山麻もくすす柳の浦とありしは横岐の尾崎と
後より移は國一谷とありしとすしと源氏と進出

さして又急務より久り其後赤方宮より其の
徳天皇と海に入るゝ赤方も善月も道を通く二河
範形流前より下河を宿司温谷宿司として九列の
平家れ余堂と退治と心志空初上は役のふく
赤摩善月と宮東勝取圍して討んとせしとも案内と
く知りて是の夜彼方の山陰の河と竹をけて我々の宮東
勢案内の知り長進する事けり其の宮東も善月氏と相の
城の門を赤方を湯とて居城と徳の城とを舟入る
範形ハ鷹野の山れ小川の陣ととてまゝなる範形の
陣ありしと也と心とを徳と云善月宮東勝と合戦せ
交陣れ糸と云正侍の河とて以後代け居城と麻生氏

城と築て其の城と云

古賀村古城

此城を聖川の東れをくくく川とてく修て築く
くく海へくくをくくく能んく麻生信実の築城と云
いと云

相古城

細村と善月村の東山并く昔と善月洞と号し善月
村の内ととを河村とあり城と善月宿司善則、居
城と善月、河村と善則、源氏と報と平家取と忠と費し
く其子善月七郎則宗と元暦年中権京東河上後
て宮東と云其の河上と云善年ありとれとも力をも人

善月と云子孫

後にお撲れまはるる一と心ももやしかりお号と好
々まは権系と通波極朝として国をたしむるまはるる
七帝則定と云別定の子之高尾則明と云七帝則國其
子之高尾則實と云高尾則道と云 ほ名い人元弘の
乱と少武と友と高尾則道と云 は名い人元弘の
ち向一と高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
ち向一と高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
ち向一と高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
使河系と云と高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
号し征西將軍官と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
居城と云別道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
則村と云高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の

知と高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
依て高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
則次と云高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
月知の城と云高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
氏と云高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
け義則と云高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
無則と云高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
文明十三年六月大内義興と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
き一知の城と云高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
々るい人高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の
々るい人高尾則道と云高尾則道と云高尾則道と云 は名い人元弘の

あり其子孫を授て喜月丸をくまじり天正五年に
いふと少子川澄をくまじりしうはに河原と失ひ氏をよ
りぬ

竹尾古城

上は渡村より市津村と流る是麻生を佐々木清里の
居城なり永禄十年七月に麻生は佐々木清里より像
の大宮司氏貞の弟長兵衛公命自保をかかりては城を
攻破する是を清里に強て入部とて澄をいりりく
け我部よりけりともや

一ノ瀬古城

一ノ瀬村の南と西と山より是を喜月丸の三弟則村の始り

て築き居城とせしは後二麻生氏邑城と成りて云

大野村古城

大野村より上尾倉村の境に麻生氏の古城あり
と云

陣原

是喜月丸の三河守範光のまに我しはとありあり
陣の系と号し前記より長政は其家信井と因防
初めは其所れ城と居るなり元禄元年其所の城と云ふ
ちて後をいへし宅をかまへく居住すといふに流沙あり
け村を定むる村の枝村あり

馬崎古城

後田村の上れ山ありけり昔より城あり 長政公入
の後築まひ家臣井上因防とせとさへもいほ昔の
三河といふい城山の南に禁と農人の宅一區あり三河
といふ所とさへは是より後て三河城と名づく然り昔
よりあり後田村と三河の城と来て後より三河の
城とともなりといふ所より三河の所れ名残すといふ三河と稱す
元和元年一國一城の外宮役印すといふ 台命とし
といふ城とこほりまじり

帆柱山古城

然り村に属し村人の言傳あり 神切皇后新羅と征伐
しり河舟船の帆柱といふ切あり帆柱山といふ

後鳥羽院建久五年宇都宮上野分業業として人能前
國の内之より所の地とゆくといひ地よりを聖徳麻生と尾
乃城とを立後帆柱山といふ城と築なり宇都宮と改く
麻生と稱し是を聖徳麻生氏の元祖と然り村は後田村
田所鳴水の所といふと麻生の所といふと家の稱号と
より後より麻生氏の所といふと後田の所と稱すといふ
麻生とちがひ宇都宮といふと兼てより麻生氏と稱す
といふ天正十四年のを 秀吉公九列征伐のときにして山
澄京上田孝高よりいひるまは帆柱山乃城といふ後れ
孝高は家臣之宅山を更と城ありして入意とすといひ山更
けきの山れり宅と稱すといふと今天下移傳す

わさく宮中とておのり里々々ゆりゆりと言ふるも

尾尾山城

惟往山の少くあり前々々山々は是前々記さしや都々上野々
き業初めて城と築きすすり其子孫々々て代々麻生と
稱すい麻生氏を奉聖教及ひ下統々々と仰て主業
より教世を授けてい城々を信々り物々々姻縁の以麻生行
某乃内家ハ藩下々々々防列山々々二年係一尾尾の城ハ
其の麻生を正信の家信と留置して強々強々々々々々々々々々
山台の妻男子と産りりそ子知々時々々々内義隆は
成人一え後して麻生上統とて号々々々其父山々々て病
死すハ内氏より上統とて以て其後とし父の家福とて

り其父家信を嫡とされり山々々出はりり
事々々々々麻生の家と港々々々々城とあけて
上統とて後々々々々知々々々々中家信とてい々々大
内殿の命ありり城とめ々々後々事如罪しいりり
人教とて攻め入城と枕とて討死す人々々々々々
々々々軍勢と稱々々々々々中国勢と云々人々々々々
尾尾の城と二年年々々々々々々々々々城とす二年
と及々秋のりり其軍勢とて海嶽々々々々城のる
と云々々々々又二年攻めも後々々々々々い中と
中国へりき一尾尾和儀と稱々々々家信の故地と稱り
後々々々々言々々々々々々内氏とて云々々々

とて高き家信の其もと下りしと知るるは中
二入るに家信がて兼て其歳より二年前事
中事ありしを伴ふ城と名後しとの由を知りしは家信
能死するより先くは死すまふ命を以て城と被り討
死せんといふ事し知るは矢とハ及へしと云ふ
まは彼がてて留地も家信のらるるに留しし事し
當ても下りしと云ふ家信のらるるに留しし事し
懸原と云ふに云ふ事聖教の大川より物と云ふ聖教と
号し二十八巻の所を云ふと城と云ふ物と云ふ聖教と
退りしと云ふ使ぬりては留しし事しと云ふ聖教と
然の如く云ふ聖教と云ふ使ぬりては留しし事しと云ふ

以家信をも知し留しし事聖教と云ふ聖教と云ふ城
一上総と高尾の城と成り家信思ひたるは下りし地方
と云ふ此の如くと云ふ得る事も在りしと云ふ使ぬりて
と云ふ一里と四地の内へは山ありしと云ふ使ぬりて高尾の
城と切取す安んしとの内なるしと云ふ使ぬりて高尾の
久家信一代高尾の麻生上総と云ふ旗下とて終り其
身と終りし家信と云ふ使ぬりて高尾と云ふ使ぬりて
と云ふ高尾の城麻生と云ふ使ぬりて高尾と云ふ使ぬりて
して終りし高尾の麻生と云ふ使ぬりて高尾と云ふ使ぬりて
と云ふ二人は母と云ふ使ぬりて高尾と云ふ使ぬりて高尾と
又男子と云ふ使ぬりて高尾と云ふ使ぬりて高尾と云ふ使ぬりて

もとに源氏とて命をたもつたを思ふに人として一
 物に我意をもちて死すはよく人の心に入らざること
 可惜なれど或時興亡命をたもつと毒殺すまじき心
 の恨と毒の害意より一と指さるる心は後妻の侍女
 内二人の妻をとり其前妻を害すけし中と知せり五人
 まつらに相く逢ぬるる心まじきもの我昔等は何を僕り
 るるを思ふと目と叫びさや一夜は尾の麻生と切
 腹へ祖父家信の遺恨を思ふことと心ひりて逢ぬる
 殺すん事とてそ念ふれは泣くは心と指さるる心
 時數よりまじき心知りて一とさけし心は出奔す人として足
 るる心は前出へまじき心とて後出に殺す流浪りたる心

いとまじき心を得て尾の麻生とて一と再交祖
 父の心とせせしむる心より殺せお終つたり天正十五年
 秀吉云西征して流浪心と山子川隆景と結りたる心
 麻生流浪る家氏と浪人となりて流浪りて後より長
 政公流浪る心と始り家氏と殺地とより如水公の妹
 尾江安ら流浪る心より安ら流浪る心は後嫁婦なりと家
 氏と定と成りし心より家氏内りをとやるとん主婦不
 和として如水公の妹を殺して家と出り人の家氏と流
 る其分は麻生と流浪る心より長政公ははる心より
 流しとて正田の家とあり

内藤陣山

帆柱山と高尾山の間にあり小山は是ハ麻生家信高尾
城と捕籠りたる中國勢より攻む二年方討陣せし
時中島勢一掃乃大將と内反何系と云一若けは陣を
接へ馬場とこいし人高尾の城と目りしを毎朝馬と
妻とせたる家信城中より是と入て家来をこころの城
乃上より下りて毎朝馬と妻と事内外のま物と家来
は村より接へて内反の陣にこそを夫と射とせしと人
ともいふ射撃する物と家信の死守たりと云われハ
家来た云々のいささう内反の陣に四丁のりありて
さすし終つた射と探のし作らば是れと云れハ家信
死してさすし終つた射と探のし作らば是れと云れハ家信

も八人探ひ出し是と麻生家の八張らと号ひかして
おのころをさすし後日高馬場をさす見物と云と八人
の射と二つと云いしと夫と射つ何事の夫と申りたる場
それ馬のやと射しと云は馬と云は射しと云は城中と兼
ての議定と云は夫と申りたると云は及しと云は二十人の内張の二
十二人れ者も八人とお加り射しと云は事ありと云は是れ
知し絶しと云は合二十人れ者も射しと云は射しと云は内反
と云は別陣と云は帆柱山の東より西の方と陣と
習らると云

藤谷古城

左衛門村松光村と邑の境あり山と云は城主評あり麻

生氏の瑞珠なりき

同郡島脚之内

山麻村古城

ありて川と流れて山の川瑞くとも氏家多し山麻兵
為次秀吉を居りし城址あり平家物語なりと考ふる
と壽永二年九月平家頼朝方之命惟義と進言して
太宰府と為りしも一々山麻兵為次秀吉を殺す人として
平家の御連とありしと考ふるも是れも山麻乃
城と稱する山麻へも亦敵ありしと考ふるも取
もぬる人平家山麻と考ふるも是れも山麻乃

柳浦と流れても考ふるも是れは山麻の事と一説あり

安徳天皇の御命を山麻の城より東北に山ありと云
ふは流る城と別して山麻は城と山麻氏代は城と一
山麻籠城ありしなり是等福天文は此の人と考ふる
して亡しややけ城と麻生氏の城ありしなり天正十
一年秀吉九列征伐し多の村麻生と鑑外元重と
しめを在城せりし家入おはしに考ふるも是れは五月
若崎の沖陣ありし也秀吉よく謂すは城と考ふる
て考ふるも是れは遠望郡眼のありし人々南方の山麻
と古河山麻山ありしなり西に於て遠くとも古河を
渡りて一とれ内ありては是れなり

濱田古城

修多羅村とあり麻生氏の城なりといふ

志房山古城

島田村とあり城主はむじりといふ

宗像郡

戸服城

田崎村の南とあり宗像大宮司清氏始てい城と信じて後代に乃社勢此城に住居

吉田村古城

け村と古城のありあり大宮司三十七代氏仲の城とと宗像追考の記あり

許斐山古城

いしと城址あり大宮司十五世氏平始て築くを世々宗像大宮司家人許斐左馬守氏満右住す承徳四年五月日冬後大友義統の家臣十河左衛門守少将許斐岳の城と云いし宗像を以て許斐氏別と記右馬石松村はも往く防あり是も追考す

飯盛古城

内殿村とあり飯盛と譽へて飯と盛と云ふやとあり山村

の境内ありしより古城の址より宗像大宮司瑞城あり
考へしちも古と並りしと云 一説に氏貞は此城あり 永禄十年九月
朝日立元氏の家臣飯重とありし宗像氏よりせし並
々兵と我れ事へば一宗像の臣吉田勘海軍の致暗
其父七人守り力成りし徳らと村々りし時款と村殺す
事多し一立元氏の兵士多く殺すもさるけ勢と停易
して立元勢に返く討進討して敵と多しありしや
宗像記と記あり

白山古城

山田村とありし白山と孔たるしつとありて村家ありしと云
白山程規のやうありしありしといふ白山と云へり古城
の址も氏貞より前の大宮司朝世居城のより一と云ふ
山氏もい城と隠居山氏貞も長引よりあり十二年の
此城より住す

神湊古城

神湊と云ふと古城のありしと云 四塚と云ふ十六代宗像大
宮司氏俊瑞城とて古神甲斐と云ふのと並り又けおの
海中と瑞城とて小宮と云ふ氏家ありしと云 古城の址も是と
云ふと云 瑞城ありしと云

宗像山城跡

赤馬村の上より若く岳と云 地境を標識する村と云ふ
若く林茂りし頂上と云 城の址も若く大宮司六平次氏

後い城とてしづて備へ住す後ハ廢城とある氏貞尚書
よりし付孔くも白山十二年居住せり兼て白山の
要害より成知り城と再興して永禄六年白山の城と
きてけ城と移り常れ住す此時高岳の名と改て
嶽と云ふ祭礼の時と田嶋の在社ありしより沖内と云
と替くるり神事勅終り又け城と改り 秀吉云云正
十五年筑紫征伐の是よりけ城と入りて云一後標岩
と村の山はと云浄安寺と一宿りゆと云け付小早川
津京とい國と流りしけ城も春破りてきより 合せ
らる是に依て寛永六年け城と改りてり城跡在丸一階中
大石南に向ふ石丸村の方より云云云云云云云云云云

二九のちあは谷と云にありて丸く西も也編あり

手亮村古城

け村と古城の址より此城氏貞の村裏の土と云て 之是は
ち及と記す押へとす城跡は土と特くかきせり

宮地村古城

け邑 神切皇后の三々く留りむひー田嶋と云村の上
宮地岳と云高山より古城の址より大宮司氏貞より
と家人小極對馬一説とをりて定基として守りしめ
しと云ふ

勝浦岳古城

勝浦村の上れと云と山と勝浦岳と云け山と大宮司三

十六代氏國城跡あり

高宮岳古城

時所の境内ありけし城と評せし山の城ハ古城と云傳ふ
宗像進考曰吉原河内合馬定馬より山江征多賢
弟也忠隆忠の墓あり

本木村古城

け城跡地存し城と云宗像氏家人評斐兵部補守
りし城の址あり之系家人大務宗松よりし舍利舎村
移り岳と對して城地存し城と名付し城ハ城の浦に
城と城と云と云

舍利舎村古城

け村の境内移り岳と古城の址より宗像と初倉乃
城と立見道雪より家人大務宗松と入きて城跡あり

大禮れ古城

大隈中と云古城の址を城と不知田嶋と云れハ宗像
乃校城あり

徳重村古城

緑ヶ城と云又名跡ハ城と云大宮司馬川野部隆尚
後ハ赤岩居と云下多分倉より付此城に住す宗像進考
ハ隆尚最初ハ城に居住す後ハ片根と接りし
と云り

石丸村古城

城乃腰の城より城主より

平等寺村古城

子場乃城より城主より

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '筑前國' and '風土記'.

筑前國續風土記卷之二十五

古城古戰場目録

表狗屋郡

多々羅古戰場

陣ノ腰

吉川山古戰場

飯盛山古城

長者系古戰場

上山田村古城

下山田村城址

名嵩城址

裏狗屋郡

御館山古城

松山古戰場

和白古戰場

青柳山古城

立花山古城

團原古戰場

筑前國續風土記卷之二十五

古城古戰場

表狗屋郡

は尾村の西よりい村の西に在り浮き是と多々羅原
と云ふ安の突城懸るれ時け浮し乳杭と云て要害と云
之後にも浮て乳杭とお稱へく若くは突城の亦多々羅原
と云ふ也といけり乳杭云々より此は倭寇状と高州とて
持く者多々羅武二年二月將軍足利高氏京都の軍
より亦自て筑前よりより筑前國多々羅原の隈より若く
くつこふ像たふ可是と屬して將軍と我領と語り
入て甚き致す高氏の築あふて威勢出来りハ傳り

筑前國續風土記卷之二十五
表狗屋郡
古城古戰場
表狗屋郡
古城古戰場
表狗屋郡
古城古戰場
表狗屋郡
古城古戰場
表狗屋郡
古城古戰場

大官司より属を以て之を討つるに事石義と謂
つしけし菊池に後武重曰掃部武後ハ官方と属
して京より其氏を以て討つて中とて九國の内に入
立ると武後逃すかたてりし海よりて龜角して遠く
これハ武後路と謂て肥後國大津山の宮に居りて世
の傳とすある所と武後の少武右衛門武後八國府より
能成と號して將軍の味方ありと武後川のほとり少武
右衛門勝とす勝之後少武入道指所より太宰府の
方智山を以て城と押寄て攻めたりと武後少武ハ菊池派
大勝とめて其氏と討んとて京像の方へ逃く將軍兄
丹後中と武後戦の道先んずると武後少武ハ京像とす此

秘傳部多雅の側あり松山と云ふて先陣ハ多武と稱し
武後少武勝と號して武後少武入道と稱して武後の西を
近んて其軍と云ふる將軍陣より矢一物も討出
ず仁木細川高上松吉良石堂富山めき連て延入
命と號して戦あり菊池も勢翼とて固めて武後より
武とむる武とをりた武とつて武後比接と稱して延立
て戦ありと仁木細川吉良石堂逃とて武後と云ふ
これハ武後少武と稱して將軍兄丹後松山と云ふる真洲
崎ハ武後と云ふ武後少武と菊池と云ふる下松浦細
字野神崎の者も武後少武と稱して武後少武ハ
菊池武後の敵と防より下多武後の武を于武と云ふ

川退き暫く人馬の息と休り又奔らんとしてより分岐
菊池と淀の間の團河野原まで一歩を歩く事あり
先程後へ川を引かして一歩と僅かありて後後山へ
入ると川より多き水多し産原の合戦と申稱して仁小義長
入ると大將として菊池退治するも肥後山へ移る人
菊池より水と稱する河原大なる可惟義の多し産原乃
合戦の日源も負くけり肥後山小峠山にて自害の秋
月福永寺ハ石室府にて居りしと敵大勝して五圍ミ
多とて流すけり川河野原の城と赤星も流す事あり
ぬ菊池より一歩を歩く事あり一歩も歩かして源山の奥
川を流りたる仁小義長一色入を引かして坂の城と改て

内川彦三高と進原一能永の城と申稱して後九条
二橋とて將軍と流す事あり けしの合戦太事記 十二卷より詳なり
永福十一年五月十日大友家と毛利家といはれて合戦を
其よりとるも毛利元就能永國彦彦山の高橋隆盛と
對んとて安藝國同防長門石見の軍勢と川平し其より能永
より能永の城と申入る事あり能永の國と大友幕下國土
多し一歩も申入らざる事ありて戦も及城とて
能後とて川を引かして一歩の城と稱す系揚部又田山氏
初元田村近き流部代として在りて一歩と入て一歩乃
城と申す三人の城代と申稱して送り給う事ありけり
ハ毛利家の大將吉川元春小早川隆景ハ一歩の城と

本陣とて入るは法勝と香椎多し尾の子平とて即ちと
決りて惣大将元朝と共後出少舎と滑りて落前山
へ了は又始りて落前在陣の大友家の二將戸部清光
豊連
印辨越中守豊連吉弘近右衛門理と博多の法勝と
將と多し落前と出り迫合多し中言毛利の足は法勝
徳谷三戸桂末永左衛門軍勢と平一三光の誠とあり
博多松原と備と三光と將と共一は内と放火は法勝也
三方より勢と迫り一日の甲午の戦あり始りては
法勝徳と共中園勢負色と入る多し平聖原軍勢
末永源七と平高徳あり宗道形勢全つ完た富島
桂内記之浦あり又大友和備後守豊連三光と香川

監物依り本陣とて光永左衛門内後掃部助と始りて
毛利家の名と得一人ありの事も松原より池原と
馬の足と一面と並入る上と捨と約と共と突
かりたるも落前と共一は内と三方と共と川中と
桂内記と十六歳の若武者ありし唯一騎味方と離れ
敵と迫り少く向ひ馳せると大友勢れ中より七騎川
越り落し種と共多し即ち日も若く六中も勢博多
と川と香椎の山とより入りて香川河も元
末山原川左衛門清景と共とより兼てより香椎を
陣の法勝徳谷と共と合多し四方余人多し落前の東
と合戦と志して備へり大友の二將と共と合

戦と志はと入へりて敵と行て我んよりい方より進んで
揚南と比まんとい万七ふの勢と二ふよりけり其後勝
一万余人ありとい戸次艦連向津進まき勝艦連吉江艦
理各ふ人三ふより進んでい余其勢ハ其後
海前海後の國土二万六ふ人敵合を勝二萬二ふ余人ハ
船備あり者一ふ切と懸くも柄は舟の揚南とせし徳
痛れ名と名ふと戒て既し合戦始りたり歌味方ハ
九萬の國陸砲の音天地と響けりし軍入証して
我れよりい多し其後海の舟物とい双方死人数と証する
あり中ふ方とい吉江山早川天よりい名譽と云ふる名
將とい大友方とい戸次吉江九別とい名と得一人といりれ

牛角の戦といつ揚南よりいも入へりてい戸次
舟後艦連を呈兵五ふ人と門卒し案内と先と
澄景の舟備長船といふ所の陣と押りて勝砲八百挺一
なりおらひけり又也替て移つる流と歌色りき源
あり艦連といえ馬と云ふ一歌の舟へ近入面も右
振ると揚と雲て也りたり五ふ舟の舟も艦とて揚て
雲めり中ふ方とい清江渡といふ回夜波多燈といふ
余人とい振りしりしりお揚りて進んで名と先とと戦ひ
たり艦連の勢と雲と云ふ三丁といり近く大友方
是と力と即周といりて話の想りたりと近かりともや中
國方有也とい成りとい入りたり澄景大言ふると揚て

清和後を助く兒が波多野とありて老をとり知
せしれどもい飯田板甲の山内益田和兼羽和知東條平
時子亦お八の余人侍表と初邊と無く大と敵と
そ戦ひたる殺別の強戦をれは双方わらきて毛利勝と
立念山へ川より大なる方への傳多れ流る川へ戸次
澄連らありて十時より野由布抄移女と始りて戦死
の士甲余人も利も未永源七喜赤川九郎兼頼子
主水元永源七喜八郎と戦ひ勢を力戦し
死に物中未永源七喜八郎と戦ひ勢を力戦し
つらうと後十三人留一にりて戦死せりといふ孫の家
元朝の澄文も移り傳へりといふ如くも度と大

合戦をいりて追きせりて白骨多しありといふ

陣の強

多しと程大橋は東山より山上に陣の強といふは是
足利香氏香雅より出ていふと暫く陣と多しと後
に於て菊池と戦ひていふは

吉川山古戦場

丹野村よりいふ山の上は首隊とて小塚よりいふは
氏薩摩勢と合戦なりといふ

飯盛山古戦場

金井の村の上より城址をいふはやいふは
と後く定れ地より飯盛山のりかへりて平らなる山

を陣つたとき

丸山古城

大隈村の上より平地二段降るる同く一段降るる中より
松林以連並々墓石あり石と多く築て墳といひは連
並々城ありしや川より南より山と焼地といふ丸山
といふよりいふ丸山のより東と迫門河内といふ

草葉古城

若松山と藤原村の南より松林以連並々出城
ひらきといふ

高鳥居古城

若松山の西植木村の上より城址二段より高嶺し

物もも若松山のより東城址より西と若松山と堂
とい城とも坊國大内氏の家長松林以連並々自
居住氏以後鞠子郡親徳の城より松林正右き並口
以連並お積りしより多々或は秋月よりい城と
改より天正十年七月二十七日此城は藤原氏義弘
郡岩倉の城と改より高橋紹運自害より口八日
室濃乃城と改より岩倉室濃と秋月将実の後に
之後之より巻一降集りしよりといふ巻一これ
といふ近江統序也といふ國白殿より河内赤松と
初より西家入といふ成は河内之實父紹運事殿下
戦死より尚城といふ紹運報仇のといふ戦は後

諸々の故之敵と名を爲して於て是迄の勇士多しき事も負
死人多たれは之を死と改んて之を死と改んて之を死と改んて
在陣時付義久より中軍を其地と名を門をへし一奇者
之を大軍やと名をし中軍を義久も之を軍と名をし中
告敵も之を死と改んて之を死と改んて之を死と改んて
退く時といふ事も其の城を中軍を改んて之を死と改んて
之よりこゝへして之を勝押への事も其の城を改んて之を死と改んて
中務大輔吉実金才氏に補吉兼と名を改んて之を死と改んて
門退ぬれは其の事も其の城を改んて之を死と改んて之を死と改んて
ふ事も其の事も其の城を改んて之を死と改んて之を死と改んて
押寄の事と名を改んて之を死と改んて之を死と改んて之を死と改んて

こゝへして城を改んて之を死と改んて之を死と改んて之を死と改んて
死く難き切腹之西を大に南に二九と一丁を改んて地を改んて
竹本に生かす事も其の西を大に南に二九と一丁を改んて地を改んて
と名を改んて之を死と改んて之を死と改んて之を死と改んて
丹波を改んて之を死と改んて之を死と改んて之を死と改んて
死す十時傳之事も其の事も其の城を改んて之を死と改んて之を死と改んて
但る同由由井大炊助が攻めて攻入して之を死と改んて之を死と改んて
より大に改りたれは其の事も其の城を改んて之を死と改んて之を死と改んて
之を改んて之を死と改んて之を死と改んて之を死と改んて
りたり城大將星野中務大輔吉実の橋の上り味方と名を改んて
して死す事も其の事も其の城を改んて之を死と改んて之を死と改んて

よすて通し二の珍と密らわらるる吉寛其のぬふ川
交と十時傳集の珍白て首と密らわらる外皇登氏部お備と
らう城中の者も一人も残らぬわらうわらう何の事とい
城と密崩一城とくくわ密ら首と密一車は難き
言をくくくくくく九月十日 吉寛くくくくくく田考くく
初らる御書くく御切とほらてくく御席のくく浅
丸列の一物とくくわらわらわら

長考京古戰場

けりく長考の戦け初て九つくありありくく
くく延宝れ東側てくくくくくくくくくくくく
けまの圃くくくく御陣はくくくくくく九年九月廿三

く御歌斯波くくくくくく子初ま初とて十一歳くくく
をくくくくく太宰少武会中御清原御口会中初は
くく像くくく目松浦一黨初会七くく余人くくくく
向い初と初て菊池くく初初と初くくくくくく二十
七日菊池彦次初五くく人と二くくくく長考くく御歌て戦い
くく菊池方岩屋庵くく初将監下田常刀以下初後の勇士
三百余人初もくく初初も二初初て初と密らて宮方乃
軍勢くく二十所余門退くくく初初初初初初初初初初
城初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初

お覆て防敵くし成りたり
け軍の事太平記
三十一卷より け時相五丸
活せし如沖河くしやと又長者京のまを古墳より石
掘して石を蓋したり

上山田村古城

村より西の山より城を石

下山田村城址

村より西の山より城を石
是れ中国勝之丸の城と稱しとち友家より攻めたり
事なりと

名島城址

け城を之丸但馬古遣裁初りて築て之丸の臨城なり

天正五年 秀吉公西征するに年の夏能前國及能後
ふ三升之京二郡肥前く内基肆吉父二郡山守川隆系
と編り九國の押へしとあり五列と愛あり毛利公
中國勝と稱せし隆系と助けて此と稱めたりとの
心をくすべし隆系の居城と名流く築くべしと秀
吉公自經營ありて要害と定むるに二十二年二月廿九日
城管化の事なりとあり此世の内より此城と急りし
るゆへ城を築くも其切速くありし隆系は七年の國
と創し官中納言と任せし秀吉公山の政はり足木下
紀後守の季子重吾秀村と名ありて國と領り後
後代國之京の城と退て隠居するに安長二年二十歳

として年せらるる妻村お清して國と欲せらるる是と後の薩前
中細言と号し天正十五年より長長五年まで十二五年
の百父お清と尚城の主なり この一年妻村お清の物と
恒せしむる一巻を伴
長長五年長政より國と編り妻村を備前美作に
改め城をとりし時長政より上馬田お清の小河長助と先
よりをいけ城と交りて長政公三年の冬入屯してい
城の領あり物といけ城三方に海より一方に山にき城
より境内狭くして之を大團とすの地ありはして其
父如水よりお清にお清より福高と城を築るに依り
名清の城あり石壁橋門ありて崩して福園と運漕地
名清の城ありと在丸として之を南にけりといふと二丸と

以是を在丸より廣く今に細くありて其字井と云
是薩長系の家臣井と伝考る所なりしなり この南に城切
りて之と今にふれは云はる家臣浦島部より傳る所
なりし是の城址の跡なる圃に土太夫の宅址に商人の居
たりし所は云はる山のりかきとやけ所と福高より
移さきしは名清の所と松河村とをさき東に山と薩長系
の家臣松原下野の宅の址あり名清より美作の道路
沿道に水と流りていけ城とてお清と後
さきなるは橋の長と百石ありといふ今後にいふ云
如く橋跡に地之向いの地薩長のけりとも橋のりし
河と云あり

裏粕屋郡

沖館の山古城

香雅公の東山沖館に水のよき山とて大坂の庄一万田
浮らうともういふ一説宗像祀遺考に之苑の瑞
城ありと云是はたも一但時として城主勢をこれ
一概極めり

松山古戦場

香雅公の西南とてまをさるる氏の多しと種彦
合戦れありは所ありと云松山の後乃方と云ありと
し是神切皇后懿誓と云あり平一けむと云あり

和白村古戦場

上下多村とつる永禄十年九月廿日宗像石宮司氏貞
評斐乃らち氏流り勢い河と出でて近江と移るに
之を以て城代怒る湯入を地へて攻戦ふ双方討死の士難
兵とも二三百人とも云ありとて宗像勢評斐乃岳
とてして門をたてしぬる湯入其表あり陣をたてぬ九日
之苑但馬も評斐といふ一之苑も心元ありとて河津一
つらいつ時ぬる湯入宿陣とて云ありと云やわらの山とて
河津のありと云

青柳所古城

青柳所の東谷山村の境に古城を新築と云云古城山
あり之を氏宗の居りし河と云ふと西に城址と

曰美城と云城と云洋

之を山古我場

昔ハ二神山と云何道の時より、立花山と号し、つらや
此山七峰と南と云と云城と云と云と云一井橋山と云
平あるは一脈と云と云 此城の山の中あり山乃 西と云
松尾と云其との平あり如五六町と云松尾の西ありと白岳
山と云此城は西と云其と平ありと云一脈と云松尾の西
ありと云と云此城は西と云と云大つと云此城は西と云と云
と云と云此城の東と云と云小山大と云と云又と云と云と云
つらと云と云と云と云と云七峰あり、近江豊前前所と云
大内家と云と云と云義隆陶全萬と云と云戦と云と云陶ハ

毛利元就と云と云と云一後ハ大友家九州の探訪職と云
と云と云と云と云と云大友家と云と云と云大内家滅亡乃後ハ筑
前国大友の依と云と云と云討伐謀主立花但馬守隆載大友
大迫将監能通と云と云十三代の後亂ニ其先祖大友自載
此城と云と云と云隆載と云七世の古城と云宗麟の父
義隆と云と云隆載の字と云と云乃井橋岳と云と云立花
隆載但馬大友家と云と云加勢のと云と云湯長門入を融
泉大友家と云と云と云白岳と云と云永禄十年
九月宗隆氏貞許斐及馬を更氏満大友と云と云毛利家
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
此隆載と云湯融泉城と云と云国の系と云と云防戦と云

ある系系の十年十月二十日之元元艦載船爲湯入道
融泉國士兼多比大掌助薦野三河入道浄島とあり
ふいふ像船西の岸とありて焼くことくし由縁と
尋くしは河は涪川難波温科丹系石津とありて
むしよりおぼえてはるる船士七八人天文のほりては南
家ハ籠中ありしことも義隆討ちて程なく陶もらひ
元統中國と代名流のなれは彼も元統のつとめにて
るなりと之元元艦載と他と奪んては年西の働
く事夜に川は涪川おも勇士とてをなれは艦載と
防て年と將の物とと年國士多く謀及して是夜澄
物よりおぼえられは少なりとも獨之成りし川は涪

川と先として大略宗像ノ屬以宗像も毛利家ノ屬
せしゆ人の氏貞斜多の氏信にて與力れ士二十餘涪川は
涪川河をる侍多し附て之信而つる辰ししう初名日の
押へとす之元元艦載とせし方ととと海ととへき
と宗像くも付くと安くぬ川は涪川の首取て軍神と
なりんとて日月の方西つる働き出る氏貞ととと
兼てつと通と一松権流連並麻生上総外元ととが
ふいふとありし川は涪川ととと杉んと氏信ととと
若此等謹忠ハ之元元艦載と一掃一力と合をんことめ之元
境内と露向す宗像く共くもけ申と少道とととる
被河とがれし一歌野所河系と押出る時前後よりと

と記り岡とありて其後ハ澄志一戦とありて自
害ハ宗像氏自り勝り夫より西へ地りて立居
對陣ハ其ころ高橋艦柱秋月柱等々城強くして
其後勝能後表ハ川返れと田中沙治する形あり
是れハ立居怒る湯の勢力とありや、また其ハ軍
利ありて
終り同く亦ハ日立居怒る湯以下叙して己の城
より
是の事能くハ立居但馬と艦載ハ元來大友氏の
親族に
親代居ハ屬下として大友宗麟の悪逆を道下
恨んで大友と戦ふ毛利元就乃威勢と傳へ伊予
十二年の表流列の役と立居ハ九列して一二の
被害

とていふく山勢と名載するハ艦載ハ元來は高橋艦
柱の力と副九列とありて入りんと云を一又高橋
艦柱ハ高橋尾張と名載するハ九列と名を一山
勢と名を一事能くありハ元就国防長門西の
八万余人と流前
國之元ハ形勢として既ハ兵船ハ艦ととく大友
味方
の兵士多シハ薦野怒る湯常々艦載と名を
一て
軍ハ評定とすうて或時兵多シハ軍物薦野
淨園
艦載と名を呼連ふ人何の心あり艦載ハ
居城西橋
岳と名を兵とありて人ありて其
怒
當湯長門入る居城白岳と名を
一
事ありハ戦ありて流前と名を
一
居城西の地ハ大友氏族

の人々を始末とせしむることをいふに艦載の大半の身肉が
ありしにせいのけり事々を記すに及ぶに一月の中國海戦
の後海軍に立派たる艦隊ありしに及ぶに豊後縣戸次
丹後守艦連向科敵中守艦連吉弘を以て艦理薩前守
敵向一月二十日より立派の城と攻め城内に立派艦載
の團住人安民民部并京田敵前守艦隊の男京田中総守
親権もいり中守の敵にありし艦載隊も向中國より加
勢と敵にたれは清の左近といふ船にて立派にありし
援軍として捕獲の中國の大將は清の左近守艦連の
京田清藤尾張守は兵一万余人自身全と捨て防く京田
二万余人ありと先途と攻められ敵味方死人数各も

埋むるをいふに及ぶに艦載の家人も京田石末守
史と京田守を立派に家なき死にありしに艦載隊史科守の
多の奇子戸次艦連と科守れ利徳といふ京田守と顧
す軍守の艦連と兵と城守の門入忽り及逆一々守を
防く京の城兵度と失い敵軍の京田安民民部守を奈
田守京田守と生捕とあり京田清藤守も人殺若干
討せしむる京田の山城とありて門入あり日既と夕陽と及
ひ向科吉弘も戸次艦連も一ツもあて多勢城守の門入
は京田の艦載と後十余人城と流し出てありこの城は
京田守を暫く息休め表助あり京田清藤守以下と一ツも
一方と守破り中守の後をいふに京田守と京田守と

後軍れ士を集められとも少く後六集り此城とて切と
ん事叶難し敵の知れぬと漢のくへんとして少くこの城
と出て東とて出り西と路田石馬を更なりして少く艦
連と斯くと告ぐりけし艦連の物も取敷す八十余人の
勢とて攻めたりとて進け先鯨波とて揚ぐりたる艦載
是とて見えて艦と敵と近合をせ捕きては口惜く之とて
道よりわたりありあると相の二相も山并りあり艦載大
言多と揚て野田と出りありとて少く後とありされり
しと口惜まれと言ふ事す後千文字とて揚切也千力又脱
指海一立長くしてを死にたり十余人の侍をありれりと
後と切り其中一人をたると艦士たし下落あり

又ゆきすし落て命と今とせしと云々是ハ彼今人泪と
るるる一語一言の苦悶とも忘るる常之況我君
の福とて年久し何れ面目もて今生て再い人とはん
やとて自ら首と捨たりとて死にたり艦載の首と宗
禰とて死にたりとて田原を去りてとて死にたり是
る御之死の隙には富永掃部女御孫進吉原田氏初
先と艦連戸次艦連と野田と陣と取御孫艦連小竹
吉弘艦連の善柳と活と活と秋月言橋とと力とる國
士と討んとし後とて同年の秋八月言橋とと老清友屋張
ちハ吉原を去りて口生口死の死とととと艦載と指
て海ととと人議とととと今言骨髄とととと田原種

法も左近將監とお議して今一夜之の合戦に之を攻
めし定方の船と言んと取軍の士率と集り三将一より
孫の口方宮に別之を表へお出る之を代白根田
系は留系の方より敵出張すより急と告ぐれは野田の
戸次艦連小竹より白根艦連吉柳より吉弘艦連三方
より白根の口方宮へお出る敵の白根吉弘の両將に敵は
之を代白根の船をせしめて城に敵の船を切て
城に人殺と操入と敵と外はして戦ひたり京田清
清は戸次艦連の陣に押して之を二つとて船を
んとす艦連の大勢敵と主舟に之を代白根と戦ひ
より京田清は清をよりしりも敵岡と比して進く

今ハ通しをわはして味方と属し討死なると今と
情すおひては艦連の二馬留へ小野澤と助胤と川と
譲は二馬留より布義作も三つより白根より敵とて
開て二陣と譲は後藤孫兵衛の助胤と掛へ競つて
お戦ひ此れを戦ひ方とて一馬留へ白根とて五
馬留へ白根とて二馬留へ高野大膳元入とて一馬留へ清
は尾張も討死し中国艦も京田清は橋野も討死し
討死すもより清は尾をハ少とて一馬留へ白根の旗を
と後十余人小舟に乗りお出ても白根の地とて白根の京田清
と戦ひはして一馬留とて一馬留へ白根とて一馬留へ
多し一馬と討死すも一馬留とて一馬留へ白根とて

大書きありおろしき真の戦々亭等もろやあせり討を
さして親種も討つてく入るる新野をゆき米深川
十部戸一足房もひてまよてむこと逆り久して放し馬
のまろりと川勢をてあせせ一方とあせり西とて川
退きたる永祿十二年四月中旬毛利元就ハ龍前小宮満
のまろ徳勝と戦んとて安藤同防長門石見の勢四方
余人と川年し其先の國へ渡り進るる者共と攻て一
日川中吉川え兼少川澄系と大将として其前國
より龍前ゆきあ入其前龍前ハ大友幕下の國士又ハ
其後の士も討つて其城もろとて中国の士勢と見
ずして一戦も及ばぬ城とあけて龍後路より川退く

其先の城ハはる京田山田柿の二將敵あまろとて之
々進ハ山より人衆と下し海をとあせりてまよとて
毛利元就入の完戸四玉市川佐世福系一万余人圍
と化りけ進るるて攻戦ひたるつりてあせり城ハ
あせりたるがして中国勢之先の城中とて守の地もあま
ろをさしてまよも城中能たろて入てあせり或時城中ハ
五月あせりて其の具も懲りていんとてのやりあせり
一首れ相争とて矢文とてあせりて送るる中国陣より
あせりてやそあせりてあせりてあせりて痛りてい
書てあせりてあせり其勢もあせりてあせりてあせり
てあせりてあせりてあせりてあせりてあせりてあせり

こ及ふ中も勢と重垣多く集りて矢金と較り垣崩
し水の子と堀切一原と橋系田山も知して白屏と原と入
て山城のまき河とてると餘多川也一湯波のま河と
して石を多り是ハ河のたこ水多りと歌しんをん為こ
これとも水多きハ飯とがし事なりは後ハ山と谷と
入岩根の濕氣を交とけいもをあるりて今すりまか
こと堀てもさき山城多きハ水多しと事ゆもも飯多きを
とありけしとるかるとなれハ勇力もたて歌と防も極をし
垣多しと首と取とせんももか力のもる内と歌よ多
てためん事とと武士のたきとれと事ありと事ありと宗
麟へいしと入しんとと吉田はつと事と事いの上と

彼とていせり入されハ宗麟やてとありと河まうありと
系と河と一命をさしと一ハ河と系と歌申と忍の山城
中へ入りいせりと告てあハ城代ととつてと事と事と
吉川小早川と係系ハ元就命して浦兵部桂能定友人と
流掃部民部以下降系の兵達と宗麟の傳へ送り伝ら
同年十月十号と事と事と事と事と事と事と事と事と
立花の誠と押とと事と事と事と事と事と事と事と事と
是ハ大友家より中込の當りと何ハ大内の一室と大内
右衛門輝弘と子四郎重隆と武弘と云と事と事と事と
しと事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
すそのこありハ所ハ子孫久ハ山申麻と助と事と事と

兵と記し居子の氏族伊豫守出雲國と申入るる
河をもちたる所を國に託しと信るるをす一相傳り
け城と稱するてちりきやと元春澄系合議せま
たれとも信じて居る事とす一其時二人を相傳り
詮議の事とて得あるはけ方より相傳す一詮議といひ一
門に臨み是は枉在馬の尉強と稱しと名なれは是れ也
此書にその事應より大勢の法士と申す詮議のうれ首
と信るは詮と信るる武士と人進出て申すは此書に取
田彰と名しと申すは取ありの身とていふもとす
即退いあつと詮の中人較少くおんへい号此書に取
之て申すより申すは取將とすすも取田取に較たの

取書より人として居るたをあると感一なる
いひ代申す共
一日の内て居
と合すといひは詮と
詮と信るる事なり
と信るるより澄系浦を於て事務ありと申す
信り申用とて申すより申すは三人と詮系として人較と
強しと信るる十五日元春澄系以下三員とを稱しと申す
大友家の膏よりけ申すは山を造と押つて陣とを
取れ退くと申すとして是れとをき一既して合戦始り
去れし毛村家の川を大友に力と喰ふといふ事申す天か
ま是より風をけしと實少つて士年皆凍へしと我先
こと川を名と申すといひと重んずる士ふと爲て是といひ
と某門也と申すといひと和しむといひと申すは取軍
あるは馬にといひと人を取るる呼へしと名す
疑ひか

歌と進つるも藤原備前守國之と名とありし士
多く討たれりし事にも吉川山早川の河の中流に小倉
まで川を口十七日元就と進んで長門の地を押しける所
に今も豊前備前守今も毛打方の所一なる城に
地主ありたる元就とある所の中流に城をもつ又大友
と首と進んで河を流るの所をぬきても坂田種浦
と進んでの城と進んで押しける元就元年宗
麟其身と備後國守ありし事ありし事備前守之の
城と去年毛打方より押へ進んで坂田新倉守種浦
守浦浦兵部尉と攻めて戸次丹後守監連向孫越守
監速吉弘法進を又監理以下の法士と立花の守りし

押しける其勝二子余人之の城とありし事岡と殺し
孫越とつとけて進んで押しける城中の者たも攻
めたりし事ありし事後詰の程ありし事ありし事勝守
味方ありし事ありし事勝守ありし事ありし事城中一日
堀新く見へし事ありし事戸次白根吉弘の守りし事と城
中へ入りし事ありし事高城と攻めし事ありし事守城守りし事
さきにも大友守形守方より對して何の事も振るし城と
後して士軍の命と助けし事ありし事や吾もとりし事ありし事坂
田種とありし事士軍守形守方と守りし事ありし事成りし事ありし事
ありし事一戦しし事ありし事城と攻めし事ありし事退りし事
大友方より進んで人質ありし事ありし事ありし事軍兵隊

折原長門の地こそ送りたる是ハ吉子の柿田水津原
降系一多町を後に送り延き道一其被忍とて守へ
斯て宗麟ハ豊前筑前ハ是事終り軍切の深遠と
しつて忍事とてしきこもるゆかりを前て陣しき城
乃城へそ入るもくも國々とのあふの難下れ士はく府内
系候す天文以来中國の毛利部と名一其外龍造寺
秋月高橋の法將社とて守りてくも宗麟の武威と以
てしまた其より九列の因縁ありとて家々入る力と名
收じ筑前ハ是事ハ大事の城もまハ女史とて人々を
てちけししとて戸次丹後也監連ハ武勇也智古人
和す其意とありけれハ是事ハ城もく定て元龜二

年豊後赤司村着山の嶺の岳の城より立花の城より
移りてはる監連ちとて子五十七歳判發して道雪と
号し九列中國に於て勇名と稱せ一人ハ天文十一年
八月十日岩倉の城を占め監連の嫡子左近將監統
席とて立花監連にあらうと依て是事とし立花のきこ
紹運よりと濃兵口十五湯と名付一人は白立花へ送り
其外士中男一人も付ては去年六月方紹運監連を物
植は形とて出でて秋月の勢と戦勝て首七百余あり
けり統席十五人あり初陣ありしとて勇氣と監連を
けてははり出でてはとて思われハ天正十二年九月十日
その雪後後玉沖井村少野村とて死せしとて年七十二

とて守へし去年より大友家の士を將に加勢のこめい河より
互陣して四方に敵と攻合ふ事度くありしより多年に軍勢
と守力衰へ老病に罹りて死すも死すも死すも死すも死すも
た近將監統席より十時折はると供としてさ雪の死骸
と立見へ打ちあふまきより告やれりる紹運も立見の勢と
能前より死すまきと定りたる是と守てさ良山互陣乃
豊後勝も死すまきと定りたるは入る口二十字紹運兵
道雪の家人少将村と守るる道すかり敵地をれい用心
すへしと薦野に河も十時橋津も少将和泉も守り等と先
陣より道雪死骸と申す之紹運ハ殿に守りしなり路次
敵地をれも死すまきハ船造る後信を忠と守馬にて

これ々まは家中の終動料ありしに死後の勤士も彼是
故少せしは出合敵をくして居申す之紹運ハ岩屋の祿
に入らるる雪の死骸立見と為るまは立見山の古忠孝
院に葬らるし彼寺とを墓とさ雪ハそ人となり智勇
あり若年より弓矢と取て強さと破り強さと抜き向
ふ事と廉すとい事事は天文の末より天正年中とむと
武勇と九列に振へり加之忠義ありて高禰の忠徳とい
さめ二心あり終りしより且さ平とわつけ人の和と得り
昔死後の菊池氏宮方は此二の忠義と励し高禰地
之のて後近代死すかりてハ少身といへも紹運道雪乃
与將智勇忠義とあり強と強とあり天文十四年七月

勢岩倉の城とやうに城之紹運自害せりまじく口二十
ハら早より富澤の城にたかり兼て方智山五陣の勢
と合せて二千人と二のころけ一より退き松尾坂より攻め
る一ハおのろのたもととやうに後堂の南に尾崎より
懸いのちと城へはとせり一岩倉は城せり一ハ富澤の
城よりゆへへきより云入る城中少勢あり一岩倉の城
は城と眼のあつてかたなり一大軍に向ひ戦ふべき所
とあり一城を統増と助けて統増ハ一之虎の城におくり
ゆけしと云う城とゆへへしと云ふれハ崎津方よりお邊
ありしと必帯せし一ハ統増も城は津津方より約と愛し
統増と虜にして藩廳へ連りたる岩倉は城の
如く洋にたれ一之虎崎

津方より之虎へはと岩倉富澤の五城既とはは
すけ勢を以て其城へをけ攻めすし一あり一統席と於
てハ崎津に根をく一ハ九列と治とくまきをあれハ急き
降集りし一と云ふは是れ依て統席のやち之虎を御す
後実同動を連り日次郎を来り河津とゆへを連り口陣に
直自由布入る雪前小路わたり十時接津とゆへを連り
原麻宮内薦野と河を安東統守と云ふ大猪虎内田森下
堀足とハ統虎の前と合し一評議して日紹運の御事
すゆへ名將とせし中にも勇士多く命と捨て防くとハ九
ヶのハ大軍と云ふハ岩倉より彼を以てとあり一尚城もあの
大勢攻めしハいし一良將の勇士と云ふてなすし一と云ふは

敵を命に取らざるも統席は自害ありし御家の跡
絶せん事と悲しむも敵等君の御命を誓うても御家
長久の詮義とありし御家の跡と云或は統席は自害せん
とは非ざるも武士は生死の事と拍しは友敵と
して争ては時と時とをとりてさや既に紹運戦死し
よひて後時には時と時とを命と惜みて忠孝の事と知
しむと九國の考と名とをんは必定して敵等移骨と
盡し防戦と二十余日交へる事ありしと内と
吉云の内助勢地取らるし後時の勢と時とを運と
むくくしと内助勢地取らるし君臣たる運は極むと
一といふもありし故も一理ありしと捨難し是は尚も

極むると思ふも統席は自害ありし御家の跡
多し勇士と義と先とに時とを命と惜みて忠孝の事と知
しむと九國の考と名とをんは必定して敵等移骨と
盡し防戦と二十余日交へる事ありしと内と
吉云の内助勢地取らるし後時の勢と時とを運と
むくくしと内助勢地取らるし君臣たる運は極むと
一といふもありし故も一理ありしと捨難し是は尚も
の物と遠へどと云ふ士は難しと一といふもありしと
君恩は三とて命とを命と惜みて忠孝の事と知
統席より敵方への死を命と云ふ事内白敵より内
をと取りし御家人と命とを命と惜みて忠孝の事と知
於て自害ありし御家の跡と紹運孝死の事と一戦ありし
と云ふ御家の跡と命とを命と惜みて忠孝の事と知
せむと云ふ御家の跡と命とを命と惜みて忠孝の事と知
御家一役ありし御家の跡と命とを命と惜みて忠孝の事と知

わくくは勝太宰府と立てし御倉部と押出る歌方七
けり岩倉家満と城して宗徳の勇士多く討て軍兵若
こひの負と多りなりけり立たは寤之の要害あり上
籠り交れ士卒も岩倉より多り久し根攻存し難しとや
あひらん急しは攻めて是矢く東と陣とけ城も急く
掃拂裸城ありとこくし押とて軍陣をかこめて時
足程と出でて是をくく治癒とありける許して後
りとを送るなり初秋月桂吉ハ岩倉家満の上ハ河
とありつけ宝満と徳長城と定め岩倉も人殺と
是初倉部と多居の城ハ大内時代と松平後与奥
丸立てはは後継手初龍徳より松平並口連並徳

おしてありし近年之を城多くと取り争ふ立花押へのこり
能後出の役人星野中務多吉寛同民部少輔とを能
並たり吉和くく是吉公の先勝吉川渡河元春小早川
大内依隆系正田幼信由孝多救方れ正勝と川平し
是前少倉と若船の中はへく治は方より子軍勢
と川丸きし一をきくは是は依て宰府表初倉部
立花入寄たり軍兵凡幾あり充満くく是薩摩勢ハ
八月下旬迄く川退たりは後統席やとて居城とありハ
月亦ありする居の城と押寄を良時く是居し城と星
野中務多吉寛同民部少輔吉兼と外士卒強しは打
城と破布し門退くはは隆系孝多治をせられは

園氏の居る所し取付はと宗の京と云園字何々を繰り
立花氏とはとちあふると又永禄十年九月宗像氏貞
許安右馬守氏満太友一味の志と變へ後多と合とく
軍勢と増は是は去年太友北僧徒と意して高橋之
河と隈程と攻ん進太宰府の寄あふ加りてち多勢の
毛利元就と増ふ道中園勢は海に在陣とゆて
いふまゝ在陣とゆて防戦の用とすといふと偏く宗像
とゆりたりして宗像許變とく人勢と移入口五日立花
の城と殺向すい城と太友宗麟とく立花但馬守
監載惣留湯入とと入軍といふといふと宗像許變と居
るといふ事武略の石とて思ふといふと城と守り

の兵と並ぶ城代多勢と率し立花ととりて監載
と席内太友と陣と張惣留湯融京の店と云は陣
とて宗像許變と對陣は而陣とゆは是程と出しか
砲軍ととるると後とに歌集方入礼とて我々もと宗像
許とち負て而陣とて川退くと立花惣留湯と勢集と
宗とて追うけとる歌集方日ころとる知り知るとる
中あは後の噂とや和つとらん宗像と士巨勢太和神
尾石和と先として二百余人をてと一競ひとる歌と
追退け氏貞と路とる赤野の城と川入とる是と園京
合戦といふ

